

編集後記

2015年3月で「東日本大震災」から4年が経過したが、東北の復興は着実に進んでいるのだろうか。人々の暮らしは前進しているのだろうか。福島のに帰ることができない人々の暮らしはどうなっているのだろうか。

被災した自治体では2015年3月11日に「復興の進捗状況」として、復興の歩みや、復興の主な取り組み状況が公表されているものの、人々の暮らしが大きく前進しているように感じられないのは私だけなのだろうか。報道によれば、被災した地域住民の65%の人は復興が遅いと感じているというデータがある。住宅や生業を失ってしまった人々、帰るべき地に住むことができない人々の存在に対し、私たちは真正面から日本が背負っているこの課題に真摯に向き合う姿勢が求められている。

思い起こせば、2011年3月11日という日は本学の学位授与式が挙行され、社会に巣立っていかうとする若者たちの晴れやかな日であった。おりしも震災により、社会人になろうとする若者に、今後何十年先までにも及ぶ日本社会の大きな課題がもたらされたのである。

私たちにできることは何か。少なくとも看護や福祉の専門職であれば、被災した人々の健康問題や生活問題に対してアドボケイターとして機能することや直接的な実践に取り組んでいくことなどが求められているといえよう。さらに、いま以上に国民的議論を喚起することが重要なのではないだろうか。何をなすべきか逡巡する思いである・・・

震災に思いをめぐらす2015年は『看護福祉学部学会誌』の第11巻を発行するはこびとなった。今年度は原著論文4本、研究報告4本、実践報告1本、総説2本、資料1本の投稿をいただき、内容を充実させることができた。皆様の日々の実践と研究に対する取り組みに感謝申し上げたい。

編集委員会

鈴木幸雄，鎌田禎子，内ヶ島伸也，近藤尚也，大友芳恵

北海道医療大学看護福祉学部学会誌 第11巻 1号

2015年3月31日発行

発行者 平 典子

発行所 北海道医療大学看護福祉学部学会

編集担当 鈴木 幸雄，大友 芳恵，鎌田 禎子，内ヶ島伸也，近藤 尚也

印刷所 社会福祉法人 北海道リハビリ
